過去 現在 未来 をつなぐ埋蔵文化財

NO.67

埋文群馬

MAIBUNGUNMA

埋文群馬No.67　目　次

●発掘最前線

森下宮原遺跡　ー搬入された弥生土器・古代人のぬくもりを感じる遺構と遺物・根石をもつ掘立柱建物跡ー

飛田野正佳…… 2

●いま、地域がみえてくる

西上之宮遺跡

ー群馬古墳総覧未記載の古墳群と中世遺構群ー

平方篤行・多田宏太…… 4

●整理最前線Ⅰ

後賀中割遺跡　ー謎多き渦巻文杏葉ー

川口　亮…… 6

●整理最前線Ⅱ

下里見天神前遺跡　ー使われなかった埴輪ー

大西雅広…… 7

●講演記録

ぐんま考古学講座

「縄文時代像を探る　ー水辺に残された履歴からー」

板垣詩乃…… 8

●展示記録

最新情報展レポート

板垣詩乃…… 9

掲示板・表紙の写真解説

公益財団法人

群馬県埋蔵文化財調査事業団

http://www.gunmaibun.org/

森下宮原遺跡（もりしたみやばら）　（利根郡昭和村森下）

―搬入された弥生土器・古代人のぬくもりを感じる遺構と遺物・根石をもつ掘立柱建物跡―

専門調査役　飛田野正佳

1　2021 年の調査の概要

森下宮原遺跡は、昭和インター線バイパスの整備事業に伴って調査されました。遺跡地は、利根川と片品川の合流点付近の北、片品川左岸の第二段丘上にあります。緩やかに傾斜する台地上からは、弥生時代から平安時代までの竪穴建物跡 53 棟、掘立柱建物跡 14 棟のほか土坑やピットなど豊富な遺構や遺物が発見されました。

ここでは、森下宮原遺跡発見の特筆すべき遺構・遺物を紹介します。

（1）搬入された弥生土器

隣接する二つの埋設土器が出土しました（写真１）。弥生時代前期に属し、このうちの一つは、胴部に貝殻条痕紋が施されているものでした。この土器は、東海地方からの搬入品の可能性が高く、出土状況から再葬墓と考えられています。再葬墓とは、一旦埋葬した人骨を再度洗骨など施したのちに、壺などに納めて葬るとされる葬送儀礼です。そして、この埋設土器の周囲からは、珪質頁岩の剥片石器が出土し（写真２）、葬送儀礼との関連性が指摘されています。

群馬県内では、搬入された弥生土器を用いた再葬墓の出土例がこれまでにも確認されています。森下宮原遺跡をはじめとする、これらの土器が群馬の地に搬入された経路や経緯が、今後の弥生時代研究の検討課題になってくると思います。

（写真１）埋設土器（再葬墓）

（写真２）剥片石器

（2）古代人のぬくもり感じる遺構と遺物

調査された竪穴建物のうち、古墳時代のものは、確認面からの掘り込みが深く、壁面の高さが１m近いものもありました（写真３）。Hr-FP 軽石（６世紀中葉）の堆積があり、カマドや遺物の残存状況も良好でした。

（写真３）Hr-FP の堆積する竪穴建物

（写真４）甕が据えられた状態で出土したカマド

カマド　二つの長胴甕がカマドに据えられた状態で出土し、焚口の袖石と袖にかかる天井石、燃焼部の残存壁やそれを補強する土器片や用石が確認できたもの（写真４）、煙道部が石組みによって構成されたもの（写真５）などが発見されました。

床面　人々が踏みしめた床面は、あたかもコンクリートを思わせるほど固くしまっていました。1500 年もの間、風雨にさらされながらも古代人の息吹を思わせる状況でした。

貯蔵穴・仕切溝　12 号竪穴建物の貯蔵穴は、方形の枠組みがあり、蓋が閉められるような構造でした。また、住居内の仕切りや、床材の根太を入れたと推定されている溝が確認されています。

遺物　出土遺物も整然と出土しているものがありました。甕が据えられたカマドのすぐわきに、甕の口縁部を器台にして、甕と甑（こしき）のセットが置かれた状態で出土しているさまは、あたかも調理の順番を物語るかのようであり（写真６）、坏や椀が積み重なって置かれているのを見ると、配膳寸前のようにも思えてきます（写真７）。

（写真５）石組み煙道部を持つカマド

（写真６）カマド横にある甑（こしき）

（写真７）重ね置かれた坏や椀

文字　平安時代の竪穴建物跡からは、坏の底部に墨書された土器が２点と線刻された紡錘車（蛇紋岩製）２点が出土しています。一般の集落遺跡での文字資料の発見はまれで、識字力のある人がいた証です。墨書は、「富麻呂」（写真８）と「富」と読めるものがあります。「富麻呂」は名前でしょうか。紡錘車の刻書は、上面に「神奉」と読めるもの（写真９）と、「男信郷（なましなごう）物部（もののべ）」と刻まれたものとがあります。「神に奉げる」と地名と氏名が記されたもので、どんな背景があるのか興味深いです。

森下宮原遺跡は、古代人の息吹や知恵・工夫がこのようにたくさん感じ取れる遺跡です。

（写真８）墨書土器（富麻呂）

（写真９）刻書紡錘車（神奉）

（３）根石をもつ掘立柱建物跡

調査区の最も南側から、６棟の掘立柱建物が発見されました（写真 10・11）。掘立柱建物は東西方向に並んでいて、柱穴の底に柱を支える根石が据えられていました。重なり合う部分があるので同時に存在していたものではなく、何回か建て直していたと考えられます。一般に集落遺跡から発見される掘立柱建物は、素掘りの穴に柱を立てる構造のものが多いようです。根石をもたせることは、上屋構造と深くかかわるということで、一定の重量に耐えられる特殊な建物であった可能性が高いようです。近辺から瓦などの遺物は出土していませんが、重量物を収納する倉庫と考えられます。

建物が瓦葺の場合などは、礎石などで支える頑丈な構造をもたせます。この掘立柱建物群の南側（次年度調査予定）からは、瓦の分布を確認できますので、礎石建物等の寺院関連の遺構が発見される可能性があり、おおいに期待されます。

（写真 10）掘立柱建物群

（写真 11）９号掘立柱建物

2　おわりに

森下宮原遺跡では、縄文時代から平安時代、近世の遺構・遺物が発見されています。空白の時期もありますが、多彩で豊かな遺構・遺物は地域の歴史を知るうえで極めて貴重なものです。地域の歴史の継承発展のためにも、大切にしていきたいと思います。

西上之宮遺跡（にしかみのみや）　（伊勢崎市西上之宮町）

―群馬古墳総覧未記載の古墳群と中世遺構群―

主任調査研究員　平方篤行
専門員　多田宏太

1　西上之宮遺跡の概要と調査経緯

西上之宮遺跡は、伊勢崎市西上之宮町の利根川左岸にあります。今回の発掘調査は、一級河川利根川（伊勢崎・玉村工区）河川改修事業 に伴うものです。令和２年度から調査が行われ、中世の墳墓や古墳等各時代の遺構が確認されています。

2　中世墳墓の発見

今回の調査では、中世に造られた墳墓が見つかりました。墳墓は古墳（3 号古墳）の墳丘にさらに土を盛って方形の土段を造成し、側面には石が積まれていました。元の３号古墳の石室も形は保ったまま石が組み直されています（写真１）。

墳頂部は石敷きで、東側は五輪塔や板碑、宝篋印塔等が立ち並び、西側は祭祀を行う空間があったようで、燈明皿として使われたかわらけが出土しています。

墳墓の年代は板碑や五輪塔に刻まれた年号から見ると、13 世紀後半から 15 世紀頃を主としたかなり長い期間使われていたようです（写真２）。

（写真 1）中世墳墓全景（上空北から）

（写真 2）墳頂部埋葬状況（西から）

3　火葬土坑

中世墳墓の周囲からは複数基の火葬土坑が見つかりました。中世墳墓に葬られた人を火葬したものと考えられます。

土坑には細い焚口が付き、側壁は熱を受けて赤くなっています。中には火葬骨や炭化した木材が灰と共に残されていました。底面には台として使ったと考えられる石が置かれていました（写真３）。

（写真 3）火葬土坑（東から）

4　出土した銭束

中世墳墓の東側からは中世の銭束が見つかっています。出土状況から見ると、何か袋状の入れ物に入れられていたようです。束にされた銭は宋銭と明銭で構成され、鋳出しのいい永楽銭が表になるように束にされています。発見時には銭の穴に通した紐が残存していました（写真４）。

（写真 4）出土した銭束（南から）

5　舟形石棺出土（西上之宮遺跡　1 号古墳）

これまでの発掘調査で、7 基の古墳が発見されています。これらの古墳は、5 世紀後半から 6 世紀後半にかけて造られました。

遺跡の西端で発見された、西上之宮遺跡 1 号古墳は、径が 35 m（周堀の立ち上がりを計測）ほどあります。トレンチ調査を行ったところ、地滑りの痕跡が見つかりました。その後の調査で、大きな重い墳丘が、強く揺られたことで、古墳の周囲が放射状に陥没し、墳丘の東側が大きく陥没していることがわかりました。この陥没のきっかけは、弘仁地震（弘仁 9(818) 年）と考えられます。

1 号古墳は、中世（鎌倉から室町時代）に、墳丘が削られ、南側には畠が営まれていました。そして、古墳上に中世に掘られた土坑の中から、舟形石棺の蓋が見つかりました（写真 5）。中世の人々が、古墳を壊して開発を進める中で、土坑に落とし込んだと考えられます。

（写真 5）1 号古墳 舟形石棺蓋（東から）

（写真 6）3 号古墳 馬形埴輪（東から　写真上が鼻）

舟形石棺のうち、出土したのは石棺の蓋のほぼ半分（残存する長さ約 140㎝）です。

当初は、石室に使われた石材と考えて掘り進めていたところ、立派な縄掛け突起が現れました。このような舟形石棺は、西毛を中心に 20 例ほどがこれまでに知られ、保渡田八幡塚古墳（高崎市）のものが有名です。その中でも、西上之宮遺跡の舟形石棺は、今のところ群馬県内で一番東で発見されたものになります。

中世墓が営まれた 3 号古墳には、石室の一部が残存し、周堀から馬形埴輪が出土しました（写真 6）。さらに、古墳の下には、5 世紀前半ごろの竪穴建物があり、様々な遺構が残されています（写真 7）。

（写真 7）西上之宮遺跡　1 号古墳全景（南から）

●現地説明会（令和 3 年 4 月 29 日開催）

西上之宮遺跡の発掘調査の成果については、令和 3 年 4 月 29 日㈭に西上之宮遺跡現地説明会を実施しました。当日はあいにくの雨天でしたが、玉村町町長をはじめ、128 名の見学がありました。1 号古墳をはじめとする古墳や遺跡から出土した、円筒埴輪や石製模造品、舟形石棺蓋を見学していただきました（写真 8）。

（写真 8）西上之宮遺跡現地説明会

見学された方々からは、石棺蓋裏に残る赤彩や 1 号古墳の大きさに驚きの声が上がりました。様々な質問が見学者から出ましたが、その中で「どうやってこんな大きな石棺を運んできたのですか？」というものがありました。西上之宮遺跡の南側に利根川が流れています。今の利根川の流路は、室町時代の応永年間にできたといわれています。これ以前には、ここに利根川がなかったともいわれていますが、今の川幅ほどではなかったとしても、川が流れていたとも考えられています。とすると、1 号古墳の舟形石棺も、水運によって運ばれたものとも考えられます。利根川が、この遺跡の豊富な遺物や遺構の背景にあるといえるのではないでしょうか。この遺跡には、利根川の変遷の謎を解くカギも隠されています。

後賀中割遺跡（富岡市後賀）

―謎多き渦巻文杏葉―

専門員（主任）　川口　亮

1　渦巻文杏葉の出土

平成29・30年度にかけて実施された後賀中割遺跡の発掘調査では、７世紀前半頃に築かれた８号古墳の横穴式石室から、装飾品や刀装具、馬具、小札甲といった豊富な遺物が出土しました。その中には、東日本２例目の発見となった「渦巻文杏葉」もありました（写真１）。

渦巻文杏葉は馬の飾りの一種で、８号古墳からは５点が出土しています。鉄棒を捩じりながら巻き込んで渦巻を形成しており、責金具と鋲には銀の薄板が張られていました。本例を含めても全国で13例しか確認されていない、大変希少な遺物です。８号古墳からは、他の馬具は小さな部品や破片しか出土していないため、全体としてどのような馬装を構成していたのかは不明確です。

東京国立博物館には、群馬県藤岡市神田出土と伝えられる渦巻文杏葉４点が所蔵されており、従来はこれが東日本唯一例とされてきました。後賀中割遺跡での発見はこれに次ぐものですが、発掘調査で発見されたものとしては東日本初となります。

渦巻文杏葉の出土は全国で13例があり、いずれも古墳に副葬品として納められていました。分布状況としては島根から兵庫にかけての地域に５例が集中するほかは、北部九州と群馬に複数例がみられます。謎の多い遺物ですが、渡来系集団との関係の深い地域から出土すること、群馬以外では１～２点ずつの出土が多いことが分かっています。また、それぞれの事例を比較していくと、サイズや細かな構造等に差異があることから、複数工房で別々に製作されたもののようです。

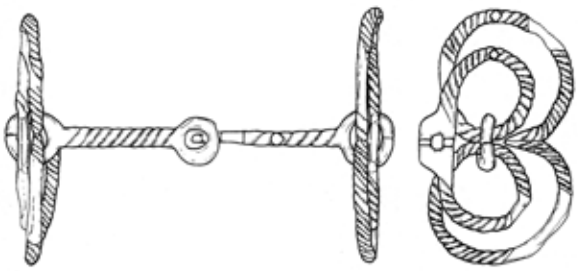
2　渦巻はどこから来たのか？

渦巻文杏葉の独特の造形は、同時代のほかの遺物にはみられないもので、その起源については議論が交わされてきました。巻貝であるイモガイを装飾に利用した馬具や、朝鮮半島の伽耶地域にみられる儀式具「有棘利器」をモデルにしているという説が提唱されていますが、いずれも渦巻文杏葉の「２個１対の内向きの渦巻」とは異なる形状であり、直接的に結び付けることは困難です。

そこで今回の検討では、馬の口に装着される轡に注目してみました。轡に付けられる鏡板という装飾には、杏葉と共通するデザインが用いられる場合があります。調べていくと、渦巻ではありませんが、円環が連なるデザインをした複環式鏡板付轡という遺物がありました（図１）。そのなかでも、東京国立博物館が所蔵している藤岡市平井周辺出土の轡は、渦巻文杏葉と瓜二つの形状をしています。こうした構造の鏡板付轡は、朝鮮半島でも出土しているようです。複環式鏡板付轡は長野県下伊那地域などの馬生産が盛んな地域から多く出土しており、馬飼いや渡来系集団との関連も想定されます。

複環式鏡板付轡が渦巻文杏葉とセットで出土した事例はなく、造形の起源としてみるには根拠が弱いですが、「他人の空似」にしては出来過ぎです。今後とも、他の馬具も含めて研究を進展させ、渦巻文杏葉の実態に迫っていく必要があります。

（写真１）８号古墳出土の渦巻文杏葉



（図１）複環式鏡板付轡（長野県上洞３号墳出土）

下里見天神前遺跡（しもさとみてんじんまえ）　（高崎市下里見町）

―使われなかった埴輪―

専門調査役　大西雅広

1　下里見天神前遺跡

下里見天神前遺跡は、令和元年度と同２年度に西毛広域幹線道路（高崎西工区）整備に伴って発掘調査が行われました。その結果、縄文時代から平安時代の集落や平安時代の水田と共に３基の古墳が確認され、そのうちの１基（５区３号墳）から未使用の埴輪が出土して注目されました。

2　使用された埴輪

５区３号墳の調査範囲は全体の６分の１程度で全体は不明ですが、周溝外側の直径が 20 mほどの横穴式石室を主体部とした円墳と推定されます。周溝幅は 1.1 mから 1.5 m、深さは 50㎝から 60㎝で、墳丘裾部には円筒埴輪が約 30㎝の間隔で樹立されていました（写真１）。

3　未使用の埴輪

５区３号墳の周溝からは、樹立した埴輪とは別に馬形埴輪１体、人物埴輪１体、朝顔形埴輪４点、円筒埴輪 17 点、須恵器２点が密集した状態で出土しました。周溝外側の壁には朝顔形埴輪を中心とした埴輪が周溝の壁に寄りかかるように、円筒埴輪を中心とした埴輪は北方向に倒れ、折り重なるような状態で出土しています（写真２）。

周溝内から出土した埴輪は基部が折れていませんので、樹立したのではなく置かれていたと判断できます。また、馬形埴輪の轡やタテガミ、人物埴輪のみずらや腕が剥落していたことから、埋納されたとも考えられません。また、埴輪が出土した周溝の墳丘部には埴輪が樹立されているため、本古墳での使用を目的として準備されたとは考えにくいでしょう。従って、５区３号墳とは別の古墳造営等、近隣での使用を目的として集積したものの、何らかの理由により使用されずに埋没したと考えています。また、その時期は６世紀前葉から中葉と推定しています。

埴輪の生産（窯）と消費（古墳）については調査例が多いですが、流通（集積）段階の調査例は貴重な発見です。

（写真１）５区３号墳埴輪出土状態（東北東から）
奥に見える墳丘部には樹立した埴輪が並び、手前の周溝内には未使用埴輪が置かれている

（写真２）周溝内の未使用埴輪出土状態（東から）
手前に口縁部が開いているのが朝顔形埴輪、左には馬形埴輪、馬の頭部側には人物埴輪が置かれている

（写真３）周溝内出土未使用円筒埴輪（左・中央）と墳丘に樹立されていた円筒埴輪（右）

縄文時代像を探る

－水辺に残された履歴から－

令和３年 11 月 20 日

専門員　板垣詩乃

1　開催にあたり

今年度のぐんま考古学講座は、東京大学名誉教授の設楽博己先生に御講演いただきました。

当事業団職員の石川原遺跡と唐堀遺跡の各発表をふまえ、「群馬県の水さらし場遺構をめぐって」と題して行われた講演は、県内の水さらし場遺構にとどまらず、衣・食・住についてのお話もあり、まさしく縄文時代像について考えさせられるものでした。

2　発表①「石川原遺跡の水場利用」鈴木佑太郎専門員

石川原遺跡（吾妻郡長野原町）は、13 基もの石組みの水場遺構のほか、生活域と墓域を伴う縄文時代後期～晩期の集落跡が発見されたことが特徴です。水場遺構から出土したトチノキなどの堅果類、木材や木製品から、遺構の用途が堅果類のアク抜きのためだけでなく、堅果類の叩打、木材の貯蔵・加工のための水漬け場など、多岐に渡っていたことについて報告がありました。

また、配石墓から出土した顔の表現のない土偶の紹介も目を引くものでした。

3　発表②「縄文時代の木の実加工場跡・唐堀遺跡」関口博幸上席研究員

唐堀遺跡（吾妻郡東吾妻町）は、貯水場・作業場・水路・廃棄場（殻捨場）からなる水場遺構のほか、配石・集石などの遺構や土器・石器などの遺物が多く出土したものの、竪穴建物が２棟しか確認されていないことから、木の実の加工のために使われた縄文時代後期～晩期の生産遺跡ととらえているのが特徴です。

ほかにも、木の実を割るための台石・磨石、木の実や肉の煮沸に使われた煤・おこげ付きの深鉢土器、シカ・イノシシの骨、石鏃・石屑などが多数出土していることについて、縄文人の狩猟採集生活の実態を表すものとし、また、水路から出土した彫刻の木柱は全国でも３例しかなく、何かしらの意味をもって埋設したものとの報告がありました。

4　講演「群馬県の水さらし場遺構をめぐって」設楽博己東京大学名誉教授

先生は、「水さらし場遺構」は堅果類などの水さらしに関わる遺構を指し、広義の水場遺構に含まれるもので、唐堀・石川原遺跡の調査例は県内で貴重であるとしています。唐堀遺跡は湧水から廃棄場までほぼ完全なかたちで検出されたことが意義深く、石川原遺跡は水さらし遺構にとどまらず多目的な水場遺構ととらえられ、複数の性格も合わせもった規模の大きな集落であると述べました。

また、全国で現在 50 例近く確認されている水場遺構のほとんどが東日本に分布し、多くが縄文時代後期以降であること、出土する堅果類は圧倒的にトチノキが多いことから、トチノキの種子の特性や加工処理の民族事例にもとづいた水さらし工程の復元を紹介し、全国でも代表的な３遺跡（赤山陣屋遺跡、寺野東遺跡、高瀬山遺跡）の水さらし遺構の構造・性格について、豊富な図やイラストを交えて解説されました。

水さらし遺構とトチノキの関係について、縄文時代中期後葉以降の冷涼化で河川の底面が低くなり、低地林と泥炭が安定的に形成されるようになって、台地＋低地という植物資源利用の拡大や重層化の結果であるとされました。また、東日本の縄文時代後期以降の文化は複雑採集狩猟民（生産的な資源に焦点を当てて集中的に活用する生業戦略と、それに応じた高い技術と単純ではない社会組織）の文化であり、その技術の高さや運用規模の大きさを水さらし場遺構の構造や規模などから指摘することができるとしています。

（写真１）　講演の様子（前橋テルサ２階ホール）

発掘情報館では、年間を通して「最新情報展」と題した企画展示を行っています。
今年度の展示内容は以下の通りです。

専門員　板垣詩乃

第１期展示「出土した文房具」

－文房四宝からみる群馬の古代史－

令和３年５月 16 日～ 10 月 17 日

古来、中国で文房四宝と呼ばれ大切にされていた墨・筆・硯・紙をメインに、古代の文房具に注目しました（写真１）。

中でも、県内で最も多く出土している文房具が硯です。ほとんどは須恵器製で、墨や紙などの有機物に比べて残りやすいためです（今日にみる石製の硯は平安時代中期頃からと考えられています）。形状によって円面硯、風字硯、猿面硯、形象硯、転用硯と分けることでき、展示では、県内各地から出土した様々な形の硯を公開しました。

円面硯に分類される獣脚硯は太田市鹿島浦遺跡から、船形の硯は伊勢崎市舞台遺跡から出土しており、特に舟形の硯は全国でも例を見ません。

また、出土数の多い硯に比べ、県内で１点のみ確認されているものが墨です。これを含め全国でも 12 点しか出土例がない貴重なものです。太田市矢部遺跡で銅製の帯金具の内側に張り付いた状態で出土したこの墨は、胞衣の風習※の可能性があります。

ほかにも、県内ではまだ出土例のない筆や、漆が付着したことで腐らずに残っていた紙などの文房具を全国の例と併せて紹介しました。今でこそ文字媒体はデジタル化していますが、明治時代までほとんど形を変えることのなかった文房具の歴史を知ることのできる展示となりました。

※子の成長を願って、胎盤とともに銭や職に関するものを人に良く踏まれる場所に埋める風習。墨や帯金具は役人のアイテム。

（写真１）古代の役人のデスクの再現が目を引く展示

第２期展示「見えてきた！環濠集落の全貌」

－高崎競馬場遺跡の発掘成果から－

令和３年 10 月 28 日～
令和４年５月中旬

G メッセ群馬の建設に先立ち、平成 26 年から発掘調査を行った高崎競馬場遺跡では、弥生時代中期後半（紀元前１世紀代）の環濠集落（ムラ）が発見されました。

ムラは居住域とマツリの域が分けられており、日常で使う土器や石器のほか、特殊な遺物も多く出土しました。

中でも、端正な顔に前歯の表現がある人形容器が印象的です（写真２）。ムラの境界付近から出土したこの人形容器は何らかの儀式に使われたと考えられます。

ほかにも、未使用の状態で埋められていた石斧、井戸の底に首を交差させて置かれていた紅白の壺など、マツリに関わると考えられる遺物が出土しました。これらの遺物は「発掘された日本列島 2021」展で東京都、北海道、群馬県の各博物館で展示され、県内外の多くの方に御覧いただきました。現在は最新情報展で展示中です。

（写真２）人形容器　前歯の表現は全国でも珍しい

掲示板

普及課からのお知らせ

令和４年度　最新情報展　第１期

「(仮)唐堀遺跡で見えた縄文人の川辺の暮らし」

５月下旬　～　９月４日(日)

平成27年から７年をかけて、発掘調査・整理を実施し、報告書刊行となった唐堀遺跡。
令和３年度のぐんま考古学講座でも紹介した遺跡概要に加え、主要な出土品を展示します。
また、上記展示関連の講演会も実施する予定です。(期日未定)

電子メールにより行事案内をお知らせしています。

■当事業団では、年間を通じて展示会や講演会などを催しています。
電子メールによるこれらの案内を希望される方は、下記のアドレスより申込みをしてください。

なお、受付時の事務処理上、事業団へ送信していただく電子メールのタイトルは「**行事案内希望**」とし、**郵便番号、住所、氏名、連絡先電話番号**を記入してください。

■電子メール送付先

gunmaifukyu @ apricot.ocn.ne.jp

※携帯電話アドレスへの連絡を希望される方は、パソコンからのメールが受信できるように携帯電話の設定をしてください。

■事業団のホームページ
http://www.gunmaibun.org/
連絡先：普及課
☎ 0279-52-2513

表紙解説

令和３年度から公開普及デーを 10 月 28 日県民の日に開催することになりました。今年度は本号で紹介した西上之宮遺跡１号古墳の舟形石棺も公開しました。新型コロナ感染症対策として個別グループでご案内した「バックヤードツアー」の一コマです。

編集スタッフ / 飛田野正佳　平方篤行　多田宏太
川口　亮　大西雅広　板垣詩乃

本誌は、一般向けの埋蔵文化財情報誌です。
当事業団ホームページ（http://www.gunmaibun.org/）から PDF をダウンロードしていただけるようになりました。
お問い合わせは、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
普及課　電話 0279-52-2513 までお願いします。

「埋文群馬」№ 67
令和４年３月 31 日発行
発行　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒 377-8555　渋川市北橘町下箱田 784-2
電話 0279-52-2513